

第1章 2002年度京都大学構内遺跡調査の概要

上原真人 清水芳裕 富井 眞

1 調査の経過

京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果により、発掘、試掘、立合に分けて実施している。2002年度には、以下のように、発掘調査4件、試掘調査1件、立合調査7件、資料整理1件を実施した。

発掘調査	本部時計台記念館改修工事（本部構内A U25区）	（第3章，図版1-296）
	北部総合研究棟（化学系）新営工事（北部構内B D28区）	（第4章，図版1-297）
	医学部学生会館新営その他工事（医学部構内A R19区）	（整理中，図版1-298）
	北部総合研究棟（農・生命系）新営工事（北部構内B F32区）	（発掘中，図版1-299）
試掘調査	農学研究科附属上賀茂演習林植林に伴う工事（京都市北区上賀茂）	（第1章，表16-300）
立合調査	吉田南構内共通教育棟新営に伴う植栽工事（吉田南構内A Q24区）	（第1章，図版1-301）
	吉田南構内総合人間学部A号館解体工事（吉田南構内A R25区）	（第5章，図版1-302）
	北部総合研究棟新営に伴う下水道工事（北部構内B B29区）	（第1章，図版1-303）
	南部動物実験施設改修その他機械設備工事（医学部構内A M19区）	（第1章，図版1-304）
	本部構内給水管埋設工事（本部構内A T25区）	（第1章，図版1-305）
	病院地区車庫および門衛詰所等解体工事（病院構内A E16区）	（第1章，図版1-306）
	学生部馬場厩舎配管に伴う工事（北部構内B G28区）	（第1章，図版1-307）
資料整理	病院地区基幹環境整備（駐車場）工事（病院構内A E19区）	（第2章，図版1-278）

2 調査の成果

(1) 吉田キャンパスの調査

前節で掲げた諸調査のうち，ここでは，これまでに整理をおえたものについて年代順にその成果を略述する。なお，病院構内A E19区，本部構内A U25区，北部構内B D28区の発掘調査については，第2章，第3章，第4章において，吉田南構内A R25区の立合調査については，第5章において，それぞれその成果を詳述している。

縄文・弥生時代の遺跡 A U25区では，縄文前期末～中期初頭の土器片が土壌化層か

ら出土している。これまでは、白川扇状地では、標高の高い北白川小倉町遺跡のほかは、北部構内に位置する北白川追分町遺跡が活発になる中期前半の船元Ⅲ式頃まで、当該期の活動はその痕跡さえほとんど認められずにいた。その意味で、わずか数点とはいえ、当時の白川扇状地での遺跡変遷を探るうえでも重要である。

従来から指摘されていた白川扇状地末端での高野川と白川とが交錯する状況については、縄文後期以降においては、ある程度明らかになってきた。縄文後期の高野川の大規模氾濫については、A E 19区の調査で後期前半の北白川上層式2期頃との時期推定ができ、白川系流路についても、B D 28区の成果から、後期後半の元住吉山式から弥生時代中期にいたるまで北部構内の南辺や北辺を流れたり、たびたび移動していたことが具体的につかめてきた。また、B D 28区では、縄文晩期に帰属すると思われるドングリの集積遺構を検出できたことに加え、木材やプラント・オパールや花粉など、縄文晩期～弥生前期末の自然環境に関するデータの蓄積も進んだ。さらに、建物基礎用の深掘りで、縄文後期の高野川の礫堤のはるか下位、現地表下6 mほどに広がる土壌化層の存在を確認したことも、上記の縄文前期末中期初頭の遺跡の確認と合わせて、北白川遺跡群の展開を考えるうえで新たな成果である。

北白川の遺跡群に関する情報・知見にとどまらず、広域的な縄文土器研究に対しても、興味深い事実を提供している。A E 19区から出土した大量の生駒西麓型と呼ばれている土器の胎土について、角閃石と輝石とを顕微鏡観察で識別し、それらの土器の産地を生駒西麓とは積極的に言えないことを指摘したことは、色調や混和材などの点から当時の土器作りにおける交流・流行を考える上で、実証的なデータを蓄積し得たと評価できる。

このほか、人為的所作の痕跡ではないが、B D 28区で白川弥生土石流の通過痕跡と思われる旧地表面の窪みを多数検出したことも重要である。過去の土石流について、その時の地表面をこのように面的に捉える試みは類例がなく、今後の事例の増加を待つ必要はあるが、堆積学や自然災害研究に対しても示唆に富む情報を提供している。

古代の遺跡 これまで平安時代の遺構をほとんど見なかった本部構内であったが、A U 25区では、10世紀初頭の土器埋納遺構を検出した。またB D 28区では、それからあまり時間をおかない10世紀前半頃に敷設された可能性の高い、条里に則って東西方向に直線的にはしる道路を検出している。北白川の再開発が9世紀後半頃から始まっていることが周辺の調査成果で知られており、この道路もそうした人々の活発化する往来に寄与したことであろう。あるいは、都から近江へ向かうルートを整備を反映したものかもしれない、いわ

ゆる白川道の歴史を考える上でも大きな発見である。一方、六勝寺や白川北殿の近くに位置するA E 19区では、平安後期に生産されたと思われる瓦が、中世の井戸から大量に出土した。その中には、これまで尊勝寺と鳥羽離宮に出土例が限られていた有段の平瓦も含まれている。

中世の遺跡 A E 19区・A U 25区では、下部構造の木質の遺存状態の比較的良い井戸を検出した。とくにA U 25区には、残存長で4 mを越えるクスノキの刳り抜き材が井筒として用いられた13世紀前葉の井戸がある。周辺に伝えられる「御館」の小字名との関連や、中世前半期の集団の実態についての検討が、今後さらに期待される。

このA U 25区の調査では、その井戸の北約50mを、12世紀後葉から15世紀前葉までは白川道が北東―南西にはしっていたことを確認しているが、近世にはこの地点を白川道は通っていないことも確認できた。白川道については既往の調査でもいろいろなことがわかってきているが、今回の成果により、近世白川道がこの西側で幾分急に北向きに方向を一度転じていることが確実となった。この道の中近世における改修・変遷の情報が増加した意義は大きい。

近世・幕末の遺跡 これまで、文献史学の研究から聖護院近傍に存在が推定されていた二代乾山こと猪八による乾山焼の窯跡の存在が、A E 19区の発掘によって現実的となったことは、近世陶磁史研究における一大成果である。猪八が聖護院で作陶したとされていた時期と同じく18世紀中葉～後葉の土坑一括資料に、錦窯片や、製作途中で失敗したと思われる「乾山」銘をもつ陶器片が多数含まれていた。この地での本焼の存否なども含めて、二代乾山による乾山焼の解明に向けた考古資料の抽出という美術史的意義は大きい。それに加えてこの調査では、現在にも伝わる黒楽焼成用の特殊なつくりの錦窯の破片が、おなじく黒色釉の付着した状態で出土しており、楽焼の製陶技術の歴史的展開の一端を考古資料からも追認し得たことも重要である。

幕末期に現本部構内に尾張藩吉田屋敷が置かれていたことは絵図から知られていたが、A U 25区の調査で、尾張産の御小納戸茶碗や多数の刻印瓦が出土し、その屋敷の実態がうかがえるようになったことの意義は非常に大きい。今回の調査成果をふまえた検討により、この絵図の史料としての重要性があらためて確認された。また、その屋敷内で用いられていた陶磁器の産地推定などから、瓦は地元の尾張産を積極的に用いているのに対して、什器は、主に瀬戸・美濃産ではなく近郊の京・信楽産を用いていることが明らかになった。近世後半期における物品流通を考えるうえで興味深い状況であろう。

(2) 上賀茂演習林の調査

京都市北区に所在する農学研究科上賀茂演習林内に、総合地球環境学研究所の設営が予定されたために、新営予定地とその関連地点の分布・試掘調査をおこなった（図1）。当該地点は、南東へ向かって流れてきた長代川が東に開けて岩倉盆地へ注ぎ込む手前の、北東に張り出した丘陵の南東斜面に位置する。この岩倉盆地の粘土を利用して、盆地の南側には古墳時代から古代にいたる瓦陶の窯跡が分布し〔京大考古研1992〕、東部は古来かわらけを生産していた木野の集落が展開している。また、当該地点とは小谷を挟んで向かい側を北東にのびる丘陵の北西斜面には、古代～中世の須恵器・緑釉陶器・土師器などが採集されていて窯跡の存在が予測されている、本山遺跡が位置する〔京大埋文研1983〕。

こうした地理的・歴史的背景から、当該地点も、窯業生産に関わる遺構などが存在する可能性はあったので、周知の遺跡とは異なる地点ではあるが、遺跡の破壊を防ぎ記録保存に備えるべく、工事に先立ち分布調査ならびにトレンチによる試掘調査をおこなった。調査の結果、遺物はまったく回収されず、試掘では、現地表下10cmで岩盤の風化粘土があらわれ、遺構も認められなかった。

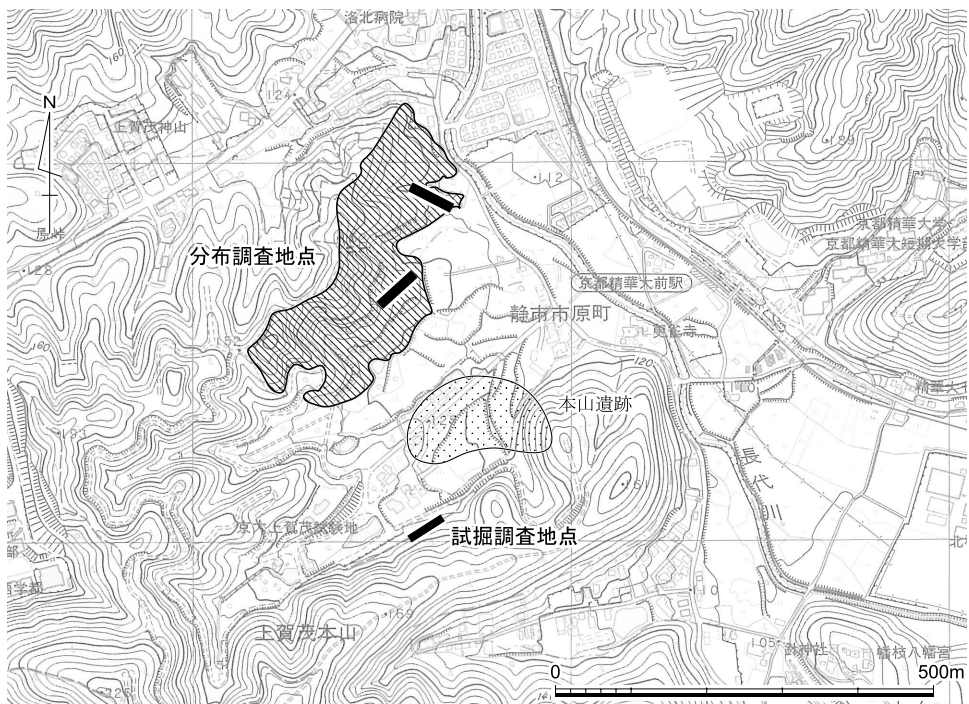


図1 上賀茂演習林の分布・試掘調査位置図 縮尺1/1万